

「早期食道癌の診断」

東京都がん検診センター 西 沢 護 著
 東松山医師会総合病院 細 井 董 三
 牧 野 哲 也

癌研究会附属病院院長

西 満 正

驚嘆すべき本

私はこの本を一読して、深い culture shock を受けたと言っても過言ではない。外科医にとって、食道癌と膵臓癌ほど労多くして報われない癌はない。すべての固型癌がかなりよく治るようになったのは、何よりも早期発見の向上によるところが大きい。ところが特に食道癌はリンパ節転移のないもの、ep 癌でないと成績がよくない。著者も“sm 癌を数多く見つけ出すだけでは、高い救命率が得られないのが食道癌である”と述べている。そして ep 癌はもちろん、mm 癌でも今まで発見が困難であった。この本はその ep 癌の発見を可能にしてくれる本なのである。食道癌の特徴、おもしろさ、不思議さを教えてくれる本である。

総論と各論を取り混ぜて、楽しく頁をめくりながら大事なことの知識が得られる。内容が豊富で美しく、しかもしっかりしていることは驚くばかりである。かんで含めるような

実技指導の文も非常にわかりやすい。診断の基本、X 線と内視鏡の比較、浸潤範囲や深達度の読み方、鑑別診断、CR の写真、特殊な疾患、食道癌の自然史、統計的・疫学的考察まで含まれている。しかもこのような幅広い総論が、わかりやすい症例から難しい症例へと具体的な症例を順序よく示しながら簡潔に述べてある。特にルゴール染色と直視型パンエンドスコープ、空気量と精密 X 線検査の重要なことがよくわかる。絶えず胃癌との対比、将来の診断法との対比をしながら話を進めておられるので、非常にわかりやすい。

図表も文章も選び抜かれ、磨き抜かれているように思う。あのきびしい白壁門下ならではの業績と思う。美しい写真や標本、スマートなレイアウト、堅牢な装幀、いずれも世界の一級品である。この本の刊行をきっかけに、ep 癌の発見が飛躍的に向上するであろうと思われる。

欲を言わせてもらえば、病理組織像でもう 1 つ強拡大の組織所見(できればカラー)がほしかった。そして鑑別を要する良性疾患の所にも生検標本でよいから、組織所見の図がほしかった。病理が好きな私のぜいたくかもしれない。一般には表層進展の範囲や深達度の判定は、まだかなりの経験、努力、感性が必要と思われる。細心の注意の積み重ねが、微小病変の発見につながることを教えてくれる。

食道・胃検診 15,654 例の中から男 0.185%、女 0.014% に食道癌を発見し、そのうち早期癌 71%、m 癌 47% であったという、驚嘆すべき成績と努力に対して限りない敬意を捧げるものである。とにかく、紛れもなくこの本は日本一、世界一の富士山を縮小したような本であると思う。その裾野は広くて深く、誇るべき純国産である。この本を熟読され、実行する方々によって ep 癌、mm 癌が多数発見され、更に何らかの内視鏡的根治療法によって手術しないで食道癌の治る日も夢ではなくなったように思う。

暗闇に新しい光を当てていただいたこの本と著者に対して、私は惜しみなく“一偶照者は国宝”の言葉を捧げる。そして初心者にも自称専門大家だと思っている人にも、是非精読をお薦めする。

B5 判 132 頁 1988 年発行 定価
 12,000 円(送料 300 円) 医学書院 刊